

特定医療法人社団千寿会三愛病院の心療内科で2011年(平成23年)4月から、東邦大学医学部教授の中野弘一医師が診療に当たっている。多くの患者と接した経験から、これまで「思っていること」を真話な文章で寄稿してもらった。

「このごろ眠れません」をコントロールしながら、50歳代の主婦の方が、「最近気がでなくて、全身のたるみが続いている」と訴え来院した。私も疲れやすさやうつ病も悩まされたこと、夜もよく休めないこと、他のメンタルクリニックでは「これといった心理的病気はない」との見立てで、内科でも検査を受けても異常はない。私たちが田舎暮らしを診察しても、からだを診

察しても、「異常なし」となしから始まる医療が「心」からだのバランスが崩れることがある。検査異常 療内科」だ。このごろとれたときの障害は、現代の医療が大きく発展したといえ、磁気共鳴画像装置(MRI)やエコーなど画像診

「このごろ」と「からだ」



三愛病院精神科療法陶芸プログラムで制作した作品

略 歴

なかの・こういち 1978年(昭和53年)東邦大学医学部卒業、97年(平成9年)東邦大学医学部心身医学教授、現在東邦大学学長補佐、産学連携本部長、教育研究支援センター長。特定医療法人社団千寿会三愛病院で心療内科医師も務める。合唱と古典落語鑑賞が趣味。神奈川県出身。60歳。



断中心の医療が比較的苦手とする領域だ。僕の専攻している「心療内科」は、診察で「からだ」の異常や「このごろ」の病態がうまく見つけられなかつたとき、いま一度角度を変えて病態を探索してみる領域でもある。主婦の方の相談も「スリーニング異常なし」から出発し、「このごろ」と「からだ」の境目の病態を再び探し出すこととした。生活全体を聞き直してみたら、家族が言っには、「寝ているときに足がピクピク痙攣していることを繰り返している」とのこと。迷宮入りするような症状の相談を、治療可能な病態に導けると、ホッとします。入り口が決まると、さあ、これから二人三脚の治療の始まりだ。

(三愛病院心療内科医師・東邦大学医学部教授)

「周期性四肢運動障害」